

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：阿曾 洋子

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	看護技術、褥瘡看護、日常生活援助、動作分析
学位	最終学歴
医学博士社会学士	佛敎大学 社会学部 社会福祉学科 卒業

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 厚生労働省 看護教員養成支援事業 eラーニングコンテンツ作成	2012年8月	通信制教育として、「専門領域別看護論」の中の「基礎看護学」の視覚教材として作成したものであり、基礎看護学の教育内容、教育方法および、評価について、映像により講義を行った。また、受講者に対しての試験問題も作成したものである。
2. 基礎看護技術演習での工夫：採血および筋肉	2010年4月	学生は、採血や筋肉注射などは皮下組織が見えないことで適切に実施できるのかの不安が高まり失敗することが多い。この失敗が自信を喪失し、これ以降の技術演習に不安を持って対応することが多いので、事前にエコーを使って皮下組織を可視化し、学生の不安をなくす工夫を行った。
2 作成した教科書、教材		
1. 基礎看護技術 第7版	2011年2月	専門教科「基礎看護技術」の教科書として出版したものであり、学習すべき援助技術について、その原理・根拠と留意事項及び実施方法を記載した著書。
2. ビデオ：看護学生のためのはじめての実習ガイド	2011年10月	看護学生が初めて実習に行くために必要な服装や心構え、応対などについて解説を行った。
3. 看護・介護のための在宅ケアの援助技術	1999年12月	在宅療養中の高齢者に対する看護援助について、看護職者の基本的姿勢、マネージメント、サポートシステム、介護保険などの基礎知識の解説や援助技術について事例をもとに援助の考え方、観察、アセスメント、看護計画、援助の実際およびマネージメントについて解説したものである。6章から成り立っている。このうち、「在宅ケアの考え方」、「在宅での援助の基本」、「日常生活援助・療養環境」、「褥瘡に対する援助」について執筆した。
4. 看護学概論	1998年2月	授業科目「看護学概論」に使用するために作成したものである。看護とは何か、看護の歴史、人と環境、健康と看護、看護の機能と業務、看護活動、看護管理、倫理、看護研究の9章から成っている。このうち、「看護の歴史」を担当した
5. 最新介護福祉全書12 医学一般・公衆衛生	1997年3月	介護福祉士を対象に、人体の機能と構造、疾患の症状、公衆衛生の現状、保健医療対策の概要、医事法制の概要、医療保険制度について基礎的な知識を解説したものである。このうち、「我が国の公衆衛生の現状」を担当し、人口動態、傷病および受療の状況、保健医療の概況について担当した。
6. 成人看護学原論	1997年11月	成人看護の基盤を築くものとして編集されたものである。本人分担は、「成人の役割と健康」、「成人を対象とする医療活動」、「成人保健の動向」であり、社会や家族のなかで成人の果たす役割や、保健や医療に関する活動、保健の動向からみた成人看護活動の方向性などについて解説した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 日本私立看護系大学協会教育セミナー	2010年1月	「論文クリティークの報告」について講義した。
2. 日本看護協会神戸研修センター 実践現場に問われている看護の研究倫理研修会	2005年7月	「看護研究における倫理、研究倫理を踏まえた臨床看護研究の進め方」の講義を行った。
3. 日本看護協会神戸研修センター 看護職の責任と静脈注射研修会シンポジウム	2004年6月	「看護職の静脈注射実施と安全管理体制」について講演した。
4. 日本赤十字社 赤十字看護管理者研修 I	2004年5月	「看護専門職論-看護技術論」の講義を行った。
5. 京都府看護協会 教育研修会	2004年12月	「看護研究について」の講義を2005年12月まで実施した。
4 その他		
1. 厚生労働省 医道審議会委員	2013年5月から2017年3月	厚生労働省 医道審議会委員として、医療職者の国家試験等に関する審議を行った。
2. 科学研究費委員会 専門委員	2010年9月から2012年8月	科学研究費補助金の授与の選考を行った。
3. 科学研究費委員会専門委員	2006年1月	科学研究費補助金の該当者の選定に当たった。
4. 厚生労働省 医道審議会 専門委員（保健師助産師看護師分科会員）	2004年6月～現在	保健師、助産師、看護師の国家試験についての審議を行った。
5. 大学評価・学位授与機構学位審査会審査委員	2004年4月から2005年3月	看護部門の学位授与のための審査を行った。

教育上の能力に関する事項				
事項	年月日	概要		
4 その他				
6. 厚生労働省 保健師助産師看護師試験委員	2003年6月から2005年5月	保健師、助産師、看護師の国家試験の作問を行った。		
職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
1 資格、免許				
1. 保健師免許	1971年			
2. 養護学校教諭1級免許	1971年			
3. 看護師免許	1970年			
2 特許等				
1. 「温度伝導率測定装置、皮膚組織血流循環 評価装置及び褥瘡診断装置」	2013年8月			
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 基礎看護技術 第7版	共	2011年2月	医学書院	<p>専門教科「基礎看護技術」の教科書として出版したものであり、学習すべき援助技術について、その原理・根拠と留意事項及び実施方法を記載した著書。</p> <p>本人担当部分：身体各部の測定、姿勢・動作、安全・安楽(p.58-123)、生活環境(p.132-175)、身体の清潔(p.190-224)、排泄(p.243-263)、医療に関する共通基礎技術(p.264-315)、酸素療法(p.355-363)、導尿、浣腸(p.375-393)、看護過程(p.404-413)、褥瘡予防(p.437-449)を担当。</p> <p>共著者名：阿曾洋子、井上智子、氏家幸子</p>
2. 実践へつなぐ看護技術教育	共	2006年9月	医歯薬出版株式会社	<p>看護実践のために必要な看護技術教育について、各看護学分野から看護教育の立場から解説を行った。</p> <p>本人担当部分：「第1章 看護技術教育の考え方」(p.2-11)、「第2章 看護教育における看護技術教育」(p.12-15)、「第3章 看護実践能力と看護技術教育との関連」(p.2-34)、「第4章 看護技術を育成する看護教育」(p.54-63)、「第5章 看護実践能力を育成するための教育側と臨床側との連携」(p.121-128)</p> <p>共著者名：阿曾洋子、奥宮暁子、鈴木純恵、藤原千恵子編著、久米弥寿子、他14名</p>
3. 褥瘡アセスメント・ケアガイド	共	2004年9月	中山書店	<p>褥瘡の創部の状態から必要なケア方法を導き出すためのツールであり、DESIGNに基づいたデータ管理を行うことができる。発生要因情報、遅滞要因情報を履歴管理でき、経過を観察することにより適切なケア方法を導き出すことができる。褥瘡患者に対するアセスメントツールに基づくアセスメント方法およびそのアセスメントに対するケア方法を解説したものである。</p> <p>共著者名：真田弘美編、阿曾洋子他12名</p>
4. 医学書院医学大辞典	共	2003年9月	医学書院	<p>医学および看護学分野で使用される語句について解説した辞典である。</p> <p>本人担当部分：陰部ケア、おむつ、看護技術、看護用品、座浴、寝衣交換、清拭、洗髪、足浴、入浴、被気候、ベッドメイキング、便器の項目について解説。(本人担当p.5分)</p> <p>伊藤正男、井村裕夫、高久史?編 共著者名：阿曾洋子他、407名</p>
5. 看護のための最新医学講座 第13巻 痴呆	共	2000年12月	中山書店	<p>看護職の最新の医学情報を提供するために、第13巻に痴呆を取り上げた。</p> <p>本人担当部分：「第6章 痴呆と社会システム」(p.304-332)を担当。 日野原重明、井村裕夫監修、武田雅俊編集 共著者名：武田雅俊、篠崎和弘、西川隆、阿曾洋子、他64名</p>
6. 看護・介護のための在宅ケアの援	共	1999年12月	廣川書店	<p>在宅療養中の高齢者に対する看護援助について、看</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
7. 看護学概論	共	1998年2月	廣川書店	<p>護職者の基本的姿勢、マネージメント、サポートシステム、介護保険などの基礎知識の解説や援助技術について事例をもとに援助の考え方、観察、アセスメント、看護計画、援助の実際およびマネージメントについて解説したものである。6章から成り立っている。</p> <p>本人担当部分：「在宅ケアの考え方」(p.1-8)、「在宅での援助の基本」p.9-16)、「日常生活援助・療養環境」(p.41-49)、「褥瘡に対する援助」(p.165-182)について執筆。</p> <p>阿曾洋子編</p> <p>共著者名：阿曾洋子、板倉勲子、大巻悦子、田中結華、中村裕美子</p> <p>授業科目「看護学概論」に使用するために作成したものである。看護とは何か、看護の歴史、人と環境、健康と看護、看護の機能と業務、看護活動、看護管理、倫理、看護研究の9章から成っている。人担当部分：「看護の歴史」(p.27-58)を担当。</p> <p>松木光子編、共著者名：阿曾洋子、大野ゆう子、小笠原知枝、松木光子</p>
2 学位論文				
1. 在宅寝たきり老人の自立意欲に関連する要因についての分析	単	1996年1月	大阪大学医学雑誌、48(1)、p.55-61	在宅寝たきり老人の自立意欲とADLの内容及び心理状態を分析し、また、ADL区別別に在宅寝たきり老人の自立意欲の有無に関連する要因を明らかにした。対象者は、1984年から1994年の10年間にI市で把握した在宅寝たきり老人総数556名である。その結果、ADLのよい老人は有意に自立意欲のある者の割合が高いこと、ADLの悪い老人では自立意欲に関連する要因として、食事、更衣動作、家族への気兼ねが選択された。
3 学術論文				
<p>1. during nursing diagnosis case study review meetings</p> <p>2. Nursing Students' Attitudes towards Nursing Process/Diagnosis Instruction Across a Multi-Year Academic Curriculum(Nursing Students' Attitudes Across a Curriculum)</p> <p>3. 高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者における非麻痺側筋肉量の変化からみた排尿援助のあり方について</p>	<p>共</p> <p>共</p> <p>共</p>	<p>2016年3月</p> <p>2016年3月</p> <p>2015年3月</p>	<p>武庫川女子大学看護学ジャーナル1(1)p.83-93</p> <p>武庫川女子大学看護学ジャーナル1(1)p.69-8</p> <p>老年看護学,18(2),p.38-47</p>	<p>本研究では、看護診断事例検討会における診断候補と看護診断上の疑問点を明らかにし、その傾向から今後の教育的サポートのあり方を検討した。具体的には、B 病院開催の事例検討会の要約記録の分析を行い、全12 事例を6 事例ずつ2 期に分けて看護診断候補と疑問点を抽出した。看護診断における思考プロセスの観点から分類した疑問内容については、フィッシャーの正確確率検定を用いて比較し、E-DOP(Egawa diagnosis-oriented process)に基づいて思考過程の課題を考察した。その結果、疑問点では、「患者の状態の臨床判断」「同時に発生する可能性がある診断」「スクリーニング段階の診断候補」「類似の心身状態を示す診断」「医療問題との判別」「セルフケア不足の捉え方」等があげられた。これらの疑問点に対し、事例と結びつけた概念学習や事例内容の見直し、各施設の特性を踏まえたサポートの必要性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画検討、データ分析、論文検討。(ページ特定不可能)</p> <p>共著者名：Yasuko Kume, Yoko Aso, Megumi Katayama</p> <p>本研究では、1 年から3 年までの複数年で開講される看護過程・看護診断教育の中での看護学生の看護過程・看護診断に対する態度についての横断的な分析を行い、教育のあり方を検討した。具体的には、(1) 看護過程・看護診断に対する認識、(2) 学習到達度自己評価、(3) 学習上の困難感、(4) 準備状態の観点から明らかにした。その結果、初級編後で認識は高まるが、その後に認識や自己評価が低下していた。中級編学習後では、看護ケアの視点で意義を認識している傾向が見られた。到達度自己評価では、中級編前や看護診断学習後では低い傾向であった。自己評価と認識等との関連性では、看護診断学習後で到達できたと自己評価した学生の方が看護診断の意義について認識している傾向があった。看護診断学習後で自己評価と認識の間に関連性が示されており、達成感を維持し、初期より連続性を維持した継続的カリキュラム構成とする必要性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画検討、データ分析、論文検討。(ページ特定不可能)</p> <p>共著者名：Yasuko Kume, Yoko Aso, Megumi Katayama</p> <p>高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者において、排尿援助方法によって非麻痺側筋肉量の変化に違いがあるのかを明らかにすることを研究目的とした。65歳</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
<p>ての検証</p> <p>4. ベッドの高さ別に見た患者上方移動援助時の横シート使用が看護師の腰部負担に与える影響（査読付き）</p>	共	2014年3月	看護人間工学研究誌, 13巻, p. 11-17	<p>以上の患者14人を対象に入院2週目と3か月目に非麻痺側筋肉量と排尿援助の調査を行った。その結果、トイレで排尿を行っていた患者は、オムツもしくは留置カテーテル内で排尿を行っていた患者より有意に非麻痺側下肢筋肉量は多く、入院中の非麻痺側下肢筋肉量の増加量も大きい傾向にあった。これより、介助を受けながらも立位保持が促される排尿援助を受けることで非麻痺側下肢筋肉量の維持・向上につながることを示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画検討、データ分析指導、論文指導。（ページ特定不可能） 共著者名：鈴木みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵</p> <p>本研究の目的は、異なる2種類のベッドの高さで上方移動援助を行う際の横シート使用の有無が看護師の腰部に与える影響を検証することである。8名の看護師を被験者とし、適切な高さのベッドと不適切な高さのベッドにおいて、上方移動援助時に横シートを使用した場合と使用しない場合の腰部負担を比較したところ、適切な高さのベッドでは、横シートを使用した場合の方が横シートを使用しなかった場合に比べ、腰部椎間板圧迫力の平均値・最大値共に有意に小さかった。しかし、高さが不適切なベッドの場合では、横シート使用の有無による腰部椎間板圧迫力の差は見られなかった。このことから、上方移動援助時に横シートを使用しても、ベッドの高さが適切に調節されていないと腰部負担の軽減にはつながらないことがわかった。</p> <p>本人担当部分：研究計画検討、データ分析、論文指導。（ページ特定不可能） 共著者名：田丸朋子、本多容子、阿曾洋子、伊部亜希</p>
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			